一般社団法人日本消化器癌発生学会

News Letter

http://www.j-sgc.org/

2018 No.1

目　次

新理事長のご挨拶…… 1
理事長退任のご挨拶…… 2
日本消化器癌発生学会への感謝とお願い－前原喜彦理事長退任に際して－…… 3
平成29年度　大原　毅賞・田原榮一賞・研究奨励賞受賞内容 …… 3
平成30年度　大原　毅賞・田原榮一賞・研究奨励賞の応募手続について …… 10
一般社団法人日本消化器癌発生学会　学会賞に関する規程…… 10
日本消化器癌発生学会　大原　毅賞・田原榮一賞・研究奨励賞　歴代受賞者一覧…… 11
歴代理事長一覧…… 14
委員会名・委員名一覧…… 14
大会長・開催地一覧…… 15
研究推進委員会からのお知らせ…… 16
日本消化器癌発生学会特別研究推進 理事長直轄プロジェクト
「癌代謝からみた発癌・進展メカニズム解明の新展開」のご報告 …… 17
第29回　日本消化器癌発生学会総会 …… 18
編集後記…… 19

新理事長のご挨拶

一般社団法人日本消化器癌発生学会　理事長　**島田光生**

日頃より、日本消化器癌発生学会の活動にご理解、ご協力を賜り、深く感謝申し上げます。

さて、私儀、2017年11月16日の理事会において、伝統ある本学会の第5代理事長に選出していただき、その栄誉と責任の重さに身が引き締まる思いであります。

本学会は、「消化器癌の発生と進展の解明」を目的として、1989年に日本消化器癌発生研究会として発足し、1997年には現在の日本消化器癌発生学会となり、初代大原 毅先生、第2代杉町圭蔵先生、第3代上西紀夫先生、第4代前原喜彦先生が理事長として大きく学会を発展させられ、2017年1月には一般社団法人となり新たな進化を続けております。

本学会の起源と特徴は、細分化され過ぎた消化器の癌を同一次元で論じ、かつその類似点、相違点を比較検討することによって、その発生・進展を知り、ひいては治療に結びつけること、すなわち、より大きな見地から消化器の癌として総括し一本の太い幹に戻ること（大原先生の言われた比較消化器癌発生学とでも言えるような学問）であり、またその研究の実現のため、臨床系（外科、内科）、病理、生化学などの各分野にわたる幅広い横断的な研究者が集い活動を行うことにあります。

本学会は、1996年に第1回国際消化器癌発生会議（International Conference of Gastroenterological Carcinogenesis）を田原榮一先生が広島で、2004年に第3回を上西紀夫先生が札幌で、2014年に第8回を前原喜彦先生が福岡で、そして今年第9回を馬場秀夫先生が熊本で本学会の支援のもと主催されることによって、早くからこの領域における世界的なプレゼンスを示してきています。

本学会は、これまでもユニークな発癌・進展の研究活動を通じ、国民の死亡原因第1位のがん対策の基盤とな

る活動を推進してきました、さらに今後も癌の予防や新たな治療法の開発を通じ社会に大きく貢献できるものと考えております。

近年、多くの若い医師が専門医研修ばかりに関心とエネルギーを使っている姿を見るにつけ、基礎医学へ接することの重要さや面白さを伝えたいと強く思っています。私は、若い医師が情熱を注ぎ、国際的な発癌・進展研究を一層発展させていけるような環境を整備することの必要性を強く感じております。

私の考えるこれからの本学会のミッションは、(1)若手研究者の更なる発掘・育成と支援、(2)学会のさらなる財政の健全化、(3)学会の英語化とグローバル化、(4)女性研究者の育成と支援と考えています。特に財政の健全化をさらに推し進めていくことによって研究助成の拡充など研究者の支援を大きくしていきたいと考えております。

私は、本学会の長い歴史や伝統ならびに前原前理事長が進めて来られたことを継承するとともに、大原先生が言われている“一つの視点にとらわれることなくさまざまな方向に向かって発展する”しなやかさと強さを持った学会として一層進化・発展するように、粉骨砕身取り組んでいく所存です。

会員の皆様、ならびに本学会の活動にご期待を寄せていただいている皆様におかれましては、さらなるご理解、ご協力、ご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

理事長退任のご挨拶

九州大学　消化器・総合外科　教授　**前原喜彦**

平成21年11月に理事長の大役を仰せつかり、8年間、理事・監事の諸先生方、評議員及び会員の皆様のお力添えにより、大過なく理事長職を終えることができました。この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。

本来、理事長の任期は3期6年でありますが、理事長在任6年目に日本消化器癌発生学会の任意団体から一般社団法人への移行という大事業が発生しましたため、この事業を中途で投げ出すのも忍びなく、止むを得ず任期を1期延長させていただきました。学会が法的に人格をもった公的組織となりましたので、財務処理の適正化、企業からの寄附の増加など、学会が今後さらに発展する素地ができたものと考えております。

2012年に、本学会の設立に功績のあった大原　毅博士、田原榮一博士を記念して、大原　毅賞(大原賞)、田原榮一賞(田原賞)を創設いたしました。優れたがん研究者の功績を表彰し、もって消化器癌発生研究の一層の振興をはかるためです。大原賞は臨床医学分野の施設において、田原賞は基礎医学分野の施設において優れた業績を挙げた研究者に授与され、受賞者は50歳未満の日本消化器癌発生学会会員の中から1年に各1名を原則としています。

また、40歳以下のがんの基礎研究を開始する若手研究者への支援と日本消化器癌発生学会への入会促進を目的とし、2011年に研究奨励賞を創設しました。若手研究者に研究助成を行うことは、質の高い消化器癌の基礎研究の推進、研究計画と成果を発表していただくことによる研究の質の向上と、学会の活性化、将来への投資など、多くの意義があるものと考えています。

新たな取り組みとして、2015年から理事長直轄プロジェクトを開始しました。その年の発表の中からテーマを決めて、優れた演題を選び、プロジェクト会議を開き、再度発表いただくことで、研究者が密度の濃い交流を行い、今後さらに独創性の高い研究成果につなげてほしいという思いからであります。その成果は次の年の本学会で発表していただくことにしています。

最後になりましたが、今後、島田光生理事長のもと日本消化器癌発生学会の更なる御発展を心から祈念申し上げまして、退任のご挨拶といたします。

日本消化器癌発生学会への感謝とお願い
ー前原喜彦理事長退任に際してー

名誉会員・公益財団法人広島がんセミナー　理事長　**田原榮一**

日本消化器癌発生学会（JSGC）は、平成元年（1989年）に大原　毅教授（東京大学第3外科）によって、比較消化器癌発生学という概念の元、消化器癌の発生・進展の機構解明を目的とした研究会として誕生しました。発起人は5名の外科教授からなるユニークな学術集会でした。平成9年には、学会となり大原　毅先生が初代理事長に就任、以来平成14年に杉町圭蔵第2代理事長、平成16年に上西紀夫第3代理事長、平成21年に前原喜彦第4代理事長が、それぞれ、JSGCの運営・発展のために尽力されました。特に、前原喜彦先生は、理事長として、8年間、強力なリーダシップを発揮され、平成23年に研究奨励賞の創設、平成24年に大原賞・田原賞の創設、利益相反の取り扱いに関する指針提言、平成26年に第25回JSGC・第8回国際消化器癌発生会議（ISGC）の会長、そして、平成28年には一般社団法人化等、まさに、JSGCの発展と進化に貢献され、多大の業績を成し遂げられた前原理事長に対して、心からの敬意と感謝の意を表したいと存じます。

平成29年11月17日、18日、熊本での第28回JSGC・第9回 ISGCの総会で前原理事長は退任され、新しく島田光生理事長が就任されました。そして、来年の第29回JSGC（落合淳志会長）では、天皇陛下の退位により平成30年が最後の年号となります。まさに、JSGCは、平成の30年間とともに歩んできたと言っても過言ではありません。学会会員数は、過去17年間、1,000名前後であり、学会のプログラムは著しくレベルが高くなっていますが、評議員以外の会員が最近著しく減少しています。前原理事長は、JSGCの進むべき道として、基礎、内科、外科の専門分野を超えた横断的研究発表の場を提供することを挙げられています。

他方、国際消化器癌発生学会（ISGC）は、1996年に創設され、第1回を広島で第6回広島がんセミナー国際シンポジウムと合同開催（1996年10月22日～24日、広島国際会議場）し、国内外の著名な癌研究者を含む約450名の参加者があり大成功でした。以来、私が事務総長としてISGCを運営し、1999年第2回ウルム（ドイツ）、2004年第3回札幌（上西会長）、2006年第4回ハワイ、2008年第5回オクスフォード、2011年第6回ヒューストン、2013年第7回フィラデルフィアとそれぞれJSGCとは独立して開催されて来ました。しかし、2014年第8回ISGC（前原会長）から第25回JSGCとの合同会議となり、そして、馬場会長による第9回ISGCと第28回JSGCと合同会議は、今後の合同会議のモデルとなる素晴らしい企画でした。更に、ISGCのOfficeとHPもJSGCに移行することとなりました。ISGCのJSGCへの移行を快く引き受けて頂いた島田理事長を初めJSGC関係者各位に衷心より感謝を申し上げます。

癌研究は医学の総合科学であり、JSGCとISGCが今後より発展・進化するためには、より包括的な分野の導入が推奨されます。具体的には、ゲノム解析やDNA・RNAの異常を予防・診断・治療への積極的導入、JDDWの如く内視鏡分野との連携、消化器癌の各々の発生・進展・治療に関する生物学的特徴のトピックスを一つのシンポジウムとしてこれまで通り毎年開催、消化器癌に対する先端的な癌治療の開発研究等の情報発信、加えて、他の学会・研究会では発表されていない新しい研究報告とJSGC機関雑誌の発刊等であります。それらを真摯に遂行され、今後JSGCとISGCが、JSGC創立50年には国内外で高く評価される質の高い学術集会へと進化することを心から切願します。

平成29年度　大原　毅賞・田原榮一賞・研究奨励賞受賞内容

平成29年度　大原　毅賞

がん集学的治療を目的としたゲノム不安定性を標的とする新規遺伝子診断法と治療の研究開発

九州大学大学院　消化器・総合外科　診療准教授　**沖　英次**

この度は、平成29年度大原　毅賞を受賞させていただき、理事長の前原喜彦先生をはじめ、選考委員の先生方、会員の先生方に深謝いたします。また、これまでご指導頂きました先輩、ご協力頂きました先生方に感謝申

し上げます。私は1996年に大学院に入学し研究をスタートさせました。当時の状況ですが、1993年にミスマッチ修復遺伝子のヒトホモログが世界ではじめてクローニングされ、それ以降一部の消化器の発癌がこのDNAミスマッチ修復の異常に起因するものと考えられ多くの研究が行われていました。特に、ミスマッチ修復異常が生じさせるゲノム上の繰り返し配列の異常であるMSI（microsatellite instability）については臨床的に多くの発表が行われており、この頃から大腸癌では、このミスマッチ修復異常が原因の癌と、染色体不安定が原因で生じる2つのタイプの癌があることが提唱されていました。前者はMSI癌、後者はCIN（chromosomal instability）癌と呼ばれています。

私達は1996年、当時オートラジオグラフィーとゲル電気泳動で行っていたMSI解析を、蛍光によるオートシーケンサーを用いて行えることを示しました[1]。しかし、当時はオートシーケンサーを販売している企業でさえ、あまり興味はもっていませんでした。しかしさらに私達は、PCRに用いられるポリメラーゼが起こすエラーの解析や（**図1**）、ミスマッチ修復異常細胞株のサブクローン解析から、その正確な評価法と診断基準を確立し[2, 3]、1998年にはいち早く検査法として確立しました。おそらく日本国内の病院としてはじめて遺伝子検査としてMSIを院内サービスとして開始したことになります。それ以後、院内での数多くの検討から、胃癌、大腸癌におけるMSIの頻度を明らかにするとともに、術後化学療法の意義との関係、左右原発大腸癌の遺伝子学的違いなど[4]を検討し、これまでに大腸癌806例を含む2,800例あまりの解析を行ってきました。

このような遺伝子の検査が消化器癌の臨床、特に外科の分野で応用されることは多くありませんでしたが、米国では2012年頃より大腸癌の術後化学療法の選択にこのMSI検査を利用する動きが本格化し、欧米のガイドラインではStageIIの結腸癌症例に関しては術後補助化学療法を行う前にMSI検査を行うことが推奨されるようになっています。さらに最近は、MSIとCINを含めて、大腸癌を4つのサブタイプに分類可能なことが知られています。このサブタイプはconsensus molecular subtype（CMS）と言われていますが、実際の臨床に応用される

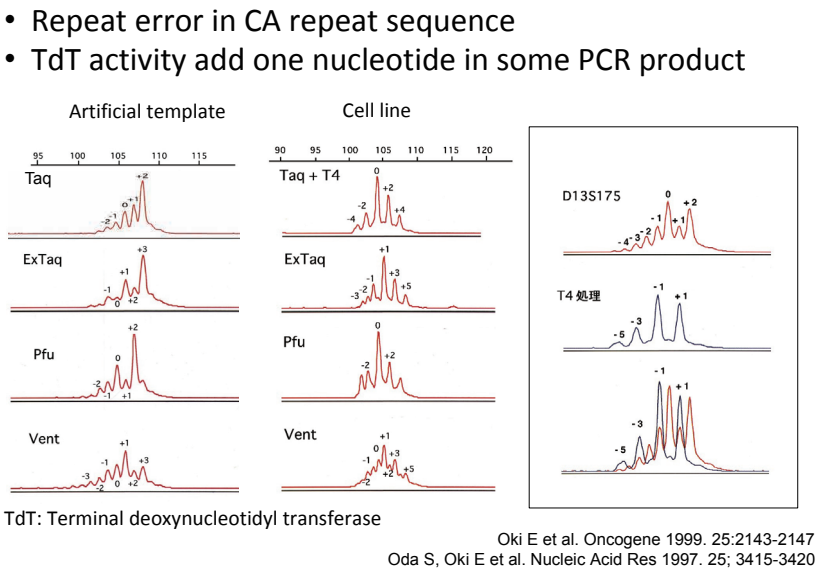


図1　PCRに用いられるDNAポリメラーゼが起こすエラー

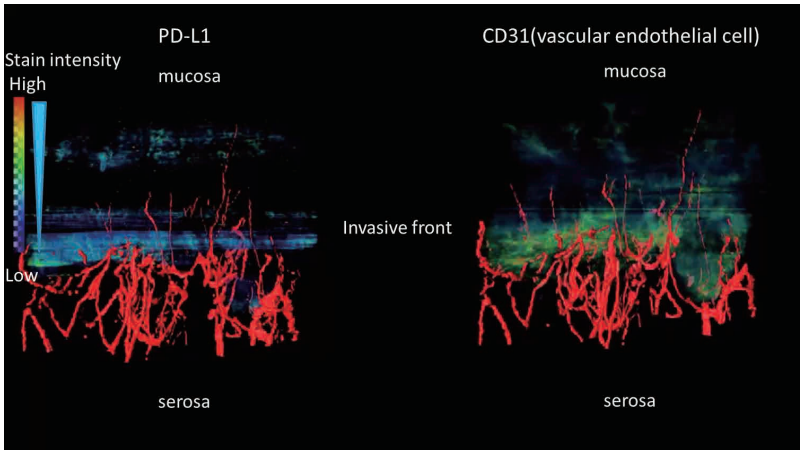
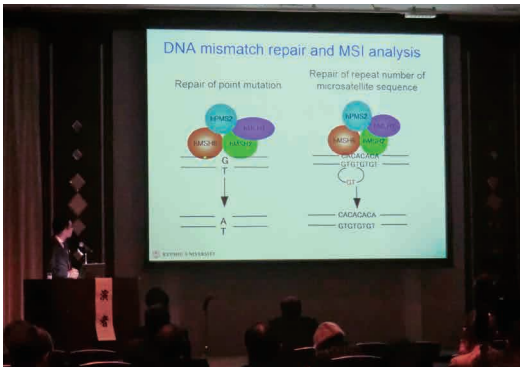


図2　PD-L1/CD31 3D model of a MSI-H CRC

には至っていません。我々は、現在国内企業と共同で、このCMSと同等のサブタイプ分類を55遺伝子のマイクロアレイ結果により得ることが可能なmuti-gene assay（55-gene classifier®：55GC）の開発とその臨床応用を行っています。この遺伝子解析ツールは、大腸癌のmolecular subtypeを簡便に分類することができるだけでなく、再発リスクが高いStage II症例、Stage III症例を抽出することが可能であり、大腸癌のサブタイプ分類が遺伝子検査としてようやく日常臨床に応用されると考えています。また最近の報告ではMSIを呈する大腸癌は免疫チェックポイント阻害剤に効果が高いことが知られ注目を集めていますが、その理由は明確ではありません。私達は、この理由を明らかにするため、病理組織の3次元構築を利用した新しい研究などを開始しています[5, 6]。



受賞講演の様子（第28回学術総会）

このような研究を継続させて頂いた先輩方には心より感謝致しております。このたびは発表の機会を頂きありがとうございました。

【参考文献】
1. Toh Y, Oki E, Oda S, Tomoda M, Tomisaki S, Ichiyoshi Y, Ohno S, Sugimachi K. An integrated microsatellite length analysis using an automated fluorescent DNA sequencer. Cancer Res 1996; 56: 2688-2691.
2. Oki E, Oda S, Maehara Y, Sugimachi K. Mutated gene-specific phenotypes of dinucleotide repeat instability in human colorectal carcinoma cell lines deficient in DNA mismatch repair. Oncogene 1999; 18: 2143-2147.
3. Oda S, Oki E, Maehara Y, Sugimachi K. Precise assessment of microsatellite instability using high resolution fluorescent microsatellite analysis. Nucleic Acids Res 1997; 25: 3415-3420.
4. Zhao Y, Oki E, Ando K, Morita M, Kakeji Y, Maehara Y. The impact of a high-frequency microsatellite instability phenotype on the tumor location-related genetic differences in colorectal cancer. Cancer Genet Cytogenet 2010; 196: 133-139.
5. Korehisa S, Oki E, Iimori M, Nakaji Y, Shimokawa M, Saeki H, Okano S, Oda Y, Maehara Y. Clinical significance of programmed cell death-ligand 1 expression and the immune microenvironment at the invasive front of colorectal cancers with high microsatellite instability. Int J Cancer 2017.
6. Korehisa S, Ikeda T, Okano S, Saeki H, Oki E, Oda Y, Hashizume M, Maehara Y. A novel histological examination with dynamic three-dimensional reconstruction from multiple immunohistochemically stained sections of a PD-L1-positive colon cancer. Histopathology 2017.

平成29年度　田原榮一賞

消化器発癌におけるDNAメチル化異常の機能的意義の解明とその応用

札幌医科大学医学部分子生物学講座　教授　**鈴木　拓**

この度は、私たちの研究を栄誉ある田原榮一賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。

発癌はジェネティックな異常と、DNAメチル化やヒストン修飾に代表されるエピジェネティックな異常の蓄積により起きる。これまで我々は、消化器癌発生におけるエピジェネティクス異常とその機能的意義について解析を行ってきた。その結果、発癌に重要なシグナル経路にかかわる多くの遺伝子が、消化器癌においてDNAメチル化異常の標的となることを報告した（**図1**）。例えば、Wntシグナルは大腸癌をはじめ多くの悪性腫瘍において活性化していることが知られているが、我々はSFRPファミリー、DKKファミリーなど分泌型Wntシグナル阻害遺伝子が、大腸癌、胃癌、肝癌、口腔癌においてメチル化していることを明らかにした。

大腸癌をはじめさまざまな臓器の癌に、CpGアイランドのDNAメチル化を同時多発的に示すCpG island methylator phenotype（CIMP）と呼ばれる一群が存在する。大腸癌は染色体不安定性（CIN）癌とマイクロサテライト不安定性（MSI）癌とに大別されるが、CIMP癌はミスマッチ修復遺伝子MLH1のメチル化を高率に示すことから、MSI癌と大きくオーバーラップする。我々は大腸腫瘍性病変の分子異常・病理組織像・内視鏡像の統合解析から、DNAメチル化やCIMPなどのエピゲノム異常が大腸発癌の早期から発生することを明らかにした。またCIMP大腸癌の前癌病変であるsessile serrated adenoma/polyp（SSA/P）に特徴的な内視鏡所見（Type II-O pit pattern）を報告した。さらにtraditional serrated adenoma（TSA）に特徴的なDNAメチル化をスクリーニングし、SMOC1遺伝子のメチル化がTSAの進展および癌化にかかわっている可能性を明らかにした。

また我々は、noncoding RNA（ncRNA）遺伝子のエピジェネティクス異常に着目し、解析を進めた。大腸癌に

おいてエピジェネティックにサイレンシングされるmicroRNA（miRNA）を網羅的に探索し、miR-34b/c、miR-1、miR-137などの遺伝子のメチル化異常を同定した（**図2**）。さらに大腸癌細胞エピゲノムにおけるヒストン修飾解析を行い、miRNA遺伝子のサイレンシングにDNAメチル化とヒストン修飾の両者が関与することを明らかにした。またこの研究手法を発展させ、大腸癌においてエピジェネティックな制御を受ける長鎖ncRNAを網羅的に探索し、ZNF582AS1遺伝子のDNAメチル化によるサイレンシングを同定した。

受賞式の様子（第28回学術総会）

また消化管間質腫瘍（GIST）の悪性度と相関するncRNAを探索し、miR-196aと長鎖ncRNAであるHOTAIRが高悪性度のGISTにおいて過剰発現していること、その原因にヒストン修飾異常が関与していることを明らかにした。これらの結果は、癌のncRNA異常が診断マーカーや治療標的として有望であることを示している。

さらに我々は、癌エピゲノム異常の診断への応用についても研究を行ってきた。まず大腸内視鏡検査とDNAメチル化解析の組み合わせによる大腸癌浸潤予測や、前癌病変の早期診断への応用を報告した。また胃癌ハイリスク患者の背景胃粘膜におけるエピゲノム異常を解析し、胃粘膜のmiR-34b/c遺伝子のDNAメチル化が胃癌リスクマーカーとなり得ることを報告した。

これらの研究結果は、札幌医科大学および共同研究施設の皆様のご協力で行われました。また研究の多くは、故・豊田実先生のご指導やアイデアに基づいています。この場を借りて、皆様に深くお礼申し上げます。

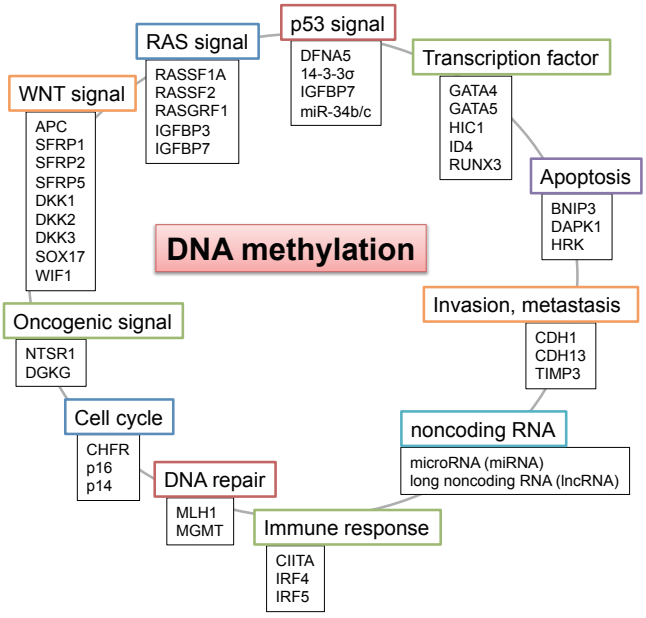


図1　癌においてDNAメチル化異常の標的となる遺伝子

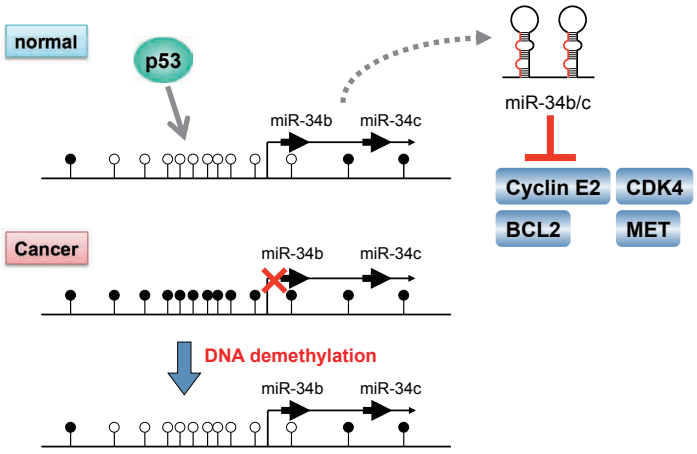


図2　DNAメチル化によるmiR-34b/c遺伝子の転写抑制

平成29年度　研究奨励賞

癌関連線維芽細胞を標的とした膵癌の新たな治療戦略

群馬大学大学院総合外科学講座肝胆膵外科学　**石井範洋**

この度は平成29年度日本消化器癌発生学会の研究奨励賞を頂き、大変光栄に感じております。理事長の前原喜彦先生をはじめ、選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

近年、癌の微小環境が注目されており、なかでも癌関連線維芽細胞（CAF）は癌の進展に重要な役割を担っていることが報告されております。このCAFを制御することが将来、癌の治療戦略の一つになるのではないかと考えており、なかでも膵癌は線維化の強い組織で、膵癌におけるCAFは重要な役割を担っていると考えられます。以前我々はConophylline（CnP）という新規化合物が肝の星細胞を抑制することを報告しましたが、これをCAFへ応用した報告はなく、今回CnPのCAFに対する効果およびCAFの抑制が膵癌細胞の進展に与える影響について検討することを本研究の目的としました。

本研究ではまず、膵癌組織より樹立したCAFの培養上清を用いて、ヒト膵癌細胞株の増殖能、浸潤能、抗癌剤感受性に与える影響について検討します。続いて、CnPのCAF抑制効果をタンパク発現、増殖抑制の点から検証し、CAFを抑制した場合に膵癌細胞に与える影響の変化について検討します。また、CnP投与の有無でのCAF上清内のサイトカインの変化についても明らかにしたいと考えております。さらにin vivo studyとして、膵癌細胞とCAFによるマウス皮下腫瘍モデルを作成し、CnPおよびGemcitabine（GEM）、CnP+GEMの治療効果の検証を行い、CAFの抑制が膵癌における新たな治療戦略として有望であるということを明らかにできればと考えております。この度の受賞を励みとし、より一層研究に精進して参りたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

平成29年度　研究奨励賞

大腸癌細胞に対するLEDの効果と光受容体の関与についての研究

徳島大学消化器・移植外科　**柏原秀也**

このたび、歴史ある日本消化器癌発生学会で研究奨励賞を頂き、大変光栄に思います 。

今回受賞に至った研究テーマは、「大腸癌細胞に対するLEDの効果と光受容体の関与についての研究」で、近年、癌の内視鏡的診断・治療（Photodynamic therapy：PDT）や創傷治癒などに応用されつつあるLED（light emitting diode）を大腸癌細胞に照射することで抗腫瘍効果を発揮するかを検討し、そのメカニズムを探るものです。

これまでに我々は、徳島大学工学部との連携によりLED装置を作成し、青色LED光（465 nm）が、大腸癌細胞に対し外因性アポトーシス亢進・増殖抑制効果を示すことで、抗癌作用があることを報告してきました（Anticancer Res. 2014）。青色LEDによる細胞増殖抑制効果の機序としてアポトーシスやオートファジー、cell cycle停止などが報告されておりますが、そのメカニズムは未だ明らかではありません。光受容体には、rhodopsinがあり、レチナールとオプシン（opsin（OPN））という光受容体タンパクによって構成されていますが、特にopsin3（OPN3）は視覚と関係のない細胞でも広く発現していることが明らかとなっています。OPN3は青色光によりGi/o Gタンパクを活性化し、アデニル酸シクラーゼを抑制し細胞増殖抑制に働くことが知られており、本研究では、大腸癌細胞においてLEDが光受容体OPN3に作用し、Gタンパクを介してアポトーシスの誘導やcell cycleの抑制を引き起こし、抗腫瘍効果を発揮するとの仮説を立て検討を行うこととしました。

このような賞を頂けましたのは、偏に島田教授の御指導の賜物ですが、加えて当教室で多大なる貢献をしてきた医局員の皆様のお陰であると深く感謝しております。今回の受賞を糧に、より一層研究に臨床に励んでいきたいと思います。

平成29年度　研究奨励賞

リキッドバイオプシーを応用した膵癌術前治療に対する新規効果判定法の開発

名古屋大学大学院消化器外科学　末永雅也

この度は、平成29年度研究奨励賞を頂きまして大変光栄に存じます。理事長の前原喜彦先生ならびに選考いただきました先生方に深く御礼申し上げます。

膵癌は最も予後不良な固形癌ですが、近年、術前治療が注目されており、予後改善への寄与が報告されつつあります。一方、術前治療における既存の効果判定法には一長一短があり、信頼性の高い手法は未だに存在しておりません。膵癌術前治療のさらなる発展のためには、信頼に足る効果判定法や予後予測のための鋭敏なバイオマーカーの開発が必要です。

これまでに我々の研究グループは、膵癌患者の血液中の循環腫瘍DNAや十二指腸液中の腫瘍由来DNAの検出を用いたリキッドバイオプシーの有用性に関する研究を行ってきました(Suenaga M, Goggins M et al. Clin Cancer Res, in press)。デジタルPCRや次世代シーケンサーといった新しい技術は検体中の大量の野生型DNAの中から極微量の腫瘍由来の変異型DNAを同定することを可能にし、また定量性にも優れております。今回、我々はこの技術を応用し、膵癌術前治療患者の経時的な循環腫瘍DNAを測定することによって、既存の画像診断や組織学的効果判定の欠点を補う新規バイオマーカーの開発を目指しております。現在、細胞株から抽出したDNAを用いて測定感度や検出限界の検証を進めつつ、教室の豊富な症例数を活かして検体採取を進めております。一定数の検体が集まり次第、循環腫瘍DNAを測定しその変化と既存の効果判定法をはじめとする臨床病理学的因子を比較検討し、その意義を検討する予定です。

今回の受賞を糧として、より一層臨床、研究に精進し、癌治療の発展に貢献できればと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

平成29年度　研究奨励賞

微小腹膜播種モデルマウスにおけるLuciferase assayを用いた新規の薬効評価法の検討

群馬大学大学院医学系研究科総合外科学　高橋　遼

この度は平成29年度の研究奨励賞という栄えある賞をいただき、誠にありがとうございます。理事長の前原喜彦先生ならびに学会賞選考委員会の先生方、またこれまでご指導・ご支援いただきました先生方に深く御礼申し上げます。

私はLuciferase assayを用いた微小腹膜播種および薬効評価法の検討につき研究をおこなっております。腹膜播種は腹腔内悪性腫瘍における再発形式の一つで予後不良因子として重要であり、その治療成績向上のために新規治療の検討が求められます。また、新規治療の検討には動物実験が必須ですが、これまでの腹膜播種モデルには腫瘍生着の評価や試験期間、また動物愛護の観点からも問題が残っていると思われます。本研究では薬効評価にあたって従来よりも実験動物の削減、実験期間の短縮を図り、かつ正確な評価を可能にするための腹膜播種モデルおよび評価法を検討し、従来臨床的に使用されてきた薬剤の腹腔内投与における有用性や、また腹膜播種に有効な新規薬剤の可能性を探り、今後の腹膜播種治療における臨床応用につき検討を進めていければと考えております。これまでの研究成果としてColon26-luc（Luciferase発現マウス大腸癌細胞株）の腹腔内投与による腹膜播種モデルマウスを用いて新規の薬効評価法の検討を進めてきました。Luciferase assayを用いることで移植後早期の腫瘍生着や肉眼的には観察困難な微小腹膜播種の評価が可能であり、従来よりも精度の高い薬効試験が実現可能となるほか、長期の生存期間を観察せずとも薬効が推測でき、またモデルが生存した状態での経時的な評価にも有用と考えております。

この度の受賞を励みに、腹膜播種治療の発展に少しでも寄与できるよう引き続き研究に精進して参りますので、今後ともご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

平成29年度　研究奨励賞

腫瘍組織の特性を反映する新規定量法に基づいたがん難治性メカニズムの解明

九州大学大学院薬学研究院革新的バイオ医薬創成学　**原田　結**

この度は、平成29年度日本消化器癌発生学会の研究奨励賞を頂戴し、大変光栄に存じます。前理事長の前原喜彦先生、理事長の島田光生先生、並びに選考に携わって頂きました先生方に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

受賞対象となりました研究の目的は、これまで有効な治療法が存在しなかった腹膜播種という病態に対する革新的新薬を創出すべく、“Sphere Biology”研究に基づくがん難治化メカニズムの解明とその治療技術開発を行うことです。

私はこれまで、がん免疫や低酸素の影響、自然退縮など、腫瘍に対する多角的な研究を進めてきました。その中で、がんの難治性にかかわるメカニズムとして『Sphere形成』に着目し、その発生機序の解明が嘱望されていた消化器がん並びに卵巣がんの最も進行した病態かつ極めて予後不良である腹膜播種の全容を解明するに至りました（Kasagi Y, Harada Y, et al. *Cancer Res*, 76: 347-357, 2016）。加えて、Sphereをターゲットとした薬物スクリーニングのためのシステム（PCT/JP2017/007029：規則的に配置された同一サイズのスフェロイド群及びその利用）の構築を行い、東大創薬機構の化合物libraryを対象に行ったスクリーニングにより、既知の化合物の中から腹膜播種に有効と考えられる化合物を複数得ることに成功しました。ところが、そのターゲット分子は多岐に渡り、抗腫瘍効果発揮のメカニズムは不明のままです。そこで、それら化合物の作用プロファイルを解き明かすことで、腹膜播種治療薬候補が奏功するメカニズムを明らかにしようとする研究を提案させて頂きました。

標準的治療が確立されていない消化器がん腹膜播種患者の福音となる治療技術の確立こそが本提案の最大の意義であると考えています。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

平成29年度　研究奨励賞

胃粘液癌の包括的ゲノム解析及び予後層別化への応用

国立がん研究センター研究所・がんゲノミクス研究分野　**六反啓文**

【これまでの研究内容】胃粘液癌は胃癌の一組織亜型であり（本邦規約では「muc」）、豊富な細胞外粘液によって特徴づけられるが、そのゲノム異常は未解明であった。私たちは、胃粘液癌の全エクソンないしターゲットシークエンスから体細胞変異を包括的に同定し、現時点で以下のような結果を得ている：①胃粘液癌ではクロマチン関連遺伝子群の体細胞変異が多い。②胃粘液癌の約13％に変異が検出された*MYH9*は、胃癌細胞株において遊走能亢進や印環細胞増加に関連する。③体細胞変異（*BCOR, MLL2, TP53*等）の有無やMLH1発現状態が、胃粘液癌の予後に関連する。

【今後の研究計画】まず上記③の内容を発展させ、胃粘液癌の予後層別化に役立つ遺伝子変異やミスマッチ修復蛋白の発現について、代替マーカーの実用性も検討しつつvalidationを行う予定である。その際、粘液癌においても良好な予後との相関が示唆された「MLH1陰性例」についても追加検討を行い、該当例の扱い方（胃粘液癌？ or MSI-H胃癌？）を論ずるに足るデータを示したい。また、これまで胃癌ではあまり着目されていなかった*MYH9*遺伝子（上記②）についても、より多くの胃癌細胞株でノックダウンを行い、発現差解析も併せ、周辺の分子機構を解明する予定である。

【謝　辞】この度は研究奨励賞にご選考いただき光栄に存じます。本学会の関係の諸先生方に厚く御礼申し上げます。また、いつも本質的な観点から御指導くださる柴田龍弘先生、行動力の大切さを教えてくださる谷内田真一先生（大阪大学）に、日頃の感謝を申し上げます。

平成30年度　大原　毅賞・田原榮一賞・研究奨励賞の応募手続について

学会賞に関する規程をご確認のうえ、各賞の申請書に必要事項ををご記入いただき、学会事務局までご送付ください。

各賞の申請書は日本消化器癌発生学会ホームページ（http://www.j-sgc.org/）からダウンロードいただけます。

【締　切】大原　毅賞、田原榮一賞：平成30年4月1日（必着）
研究奨励賞：平成30年5月1日（必着）

【送付先】一般社団法人日本消化器癌発生学会本部事務局
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F
株式会社クバプロ内

一般社団法人日本消化器癌発生学会　学会賞に関する規程

第1条　総則

日本消化器癌発生学会の学会賞については、定款並びに細則定められるもののほかは、この規程による。

第2条　大原賞、田原賞に関する規程

1. 日本消化器癌発生学会は本学会の設立に功績のあった大原毅博士、田原榮一博士を記念して、大原毅賞（大原賞）、田原榮一賞（田原賞）を設け、優れたがん研究者に授与してその功績を表彰し、もって消化器癌発生研究の一層の振興をはかる。
2. 大原賞は臨床医学分野の施設において、田原賞は基礎医学分野の施設において優れた業績を挙げた研究者の功績を讃える。
3. 受賞者は1年に各1名を原則とする。
4. 授賞候補者は、該当年の1月1日付で50歳未満の日本消化器癌発生学会会員とし、本学会評議員の推薦のもと公募し、学会賞選考委員会にて選考する。
5. 大原賞、田原賞応募者は学会ホームページに公開される要項に従い、応募書類を本会事務局に提出する。

第3条　研究奨励賞に関する規程

1. 助成対象課題は発がん、がんの進展に関する基礎研究とする。
2. 助成対象者は前項に掲げた研究を開始する、該当年の1月1日付で40歳未満の研究者で日本消化器癌発生学会の会員とし、学会賞選考委員会にて選考する。
3. 推薦者は日本消化器癌発生学会の評議員とし、推薦件数は研究機関内選考等により1推薦者に原則として1件とする。
4. 受賞者は1年に5名程度とし、受賞者には助成金として1件20万円程度を授与する。
5. 研究助成金の交付対象となる経費は、研究に要する物品の購入費用及びその研究の推進に必要な費用とする。
6. 研究奨励賞応募者は学会ホームページに公開される要項に従い、応募書類を本会事務局に提出する。

第4条　本規程の改正

本規程は理事会の議を経て改正することができる。

日本消化器癌発生学会　大原　毅賞・田原榮一賞・研究奨励賞　歴代受賞者一覧

平成29年度

大原　毅賞受賞者

・**沖　英次**（九州大学病院　第二外科・診療准教授）
　がん集学的治療を目的としたゲノム不安定性を標的とする新規遺伝子診断法の開発

田原榮一賞受賞者

・**鈴木　拓**（札幌医科大学　分子生物学講座・教授）
　消化器発癌におけるDNAメチル化異常の機能的意義の解明とその応用

研究奨励賞受賞者

・**原田　結**（九州大学）
　腫瘍組織の特性を反映する新規定量法に基づいたがん難治性メカニズムの解明
・**石井　範洋**（群馬大学大学院病態総合外科）
　癌関連線維芽細胞を標的とした膵癌の新たな治療戦略
・**中司　悠**（九州大学 消化器・総合外科）　※今号への受賞内容掲載見送り
　散発性大腸癌におけるBRAF（V600E）変異の効率的な検出法の確立とそれを利用した新しい治療法の構築
・**柏原　秀也**（徳島大学　消化器・移植外科学）
　大腸癌細胞に対するLEDの効果と光受容体の関与についての研究
・**六反　啓文**（国立がん研究センター　研究所）
　胃粘液癌の包括的ゲノム解析及び予後層別化への応用
・**末永　雅也**（名古屋大学大学院医学系研究科　消化器外科学）
　リキッドバイオプシーを応用した膵癌術前治療に対する新規効果判定法の開発
・**下川　雅弘**（九州大学大学院　消化器・総合外科）　※今号への受賞内容掲載見送り
　ストレス応答転写因子Nrf2をターゲットとした肝細胞がんの進展及び細胞内代謝改変の制御に関する研究
・**高橋　遼**（群馬大学大学院医学研究科　総合外科学）
　微小腹膜播種モデルマウスにおけるLuciferase assayを用いた新規の薬効評価法の検討

平成28年度

大原　毅賞受賞者

・**馬場祥史**（熊本大学　消化器外科）
　消化器癌におけるジェネティック・エピジェネティックバイオマーカーの探索

田原榮一賞受賞者

・**谷内田真一**（国立がん研究センター研究所）
　膵胆がんのゲノム異常とがんクローン進化に関する研究

研究奨励賞受賞者

・**坂本直也**（広島大学大学院医歯薬学総合研究科分子病理）
　CRISPER/Cas9を用いた腸型・胃型胃癌オルガノイドモデルの樹立
・**木村明春**（群馬大学大学院病態総合外科学）
　接着分子に注目した胃癌化学療法の抵抗性についての研究
・**堤　智崇**（九州大学消化器・総合外科）
　食道扁平上皮癌におけるPD-L1発現と上皮間葉移行の生物学的意義に関する研究
・**塚越真梨子**（群馬大学大学院　肝胆膵外科学）
　核ー細胞質間輸送蛋白KPNA2を標的とした胆管癌の新たな治療戦略
・**田中晴祥**（名古屋大学附属病院）
　胃癌肝転移に対する特異的診断・治療標的分子の開発
・**王　歓林**（九州大学機能病態病理学）
　肝細胞がんにおけるSALI4、HDAC1およびHDAC2発現の生物学的意義に関する研究
・**栗原弘義**（JR札幌病院）
　Molecular classificationに基づいた大腸癌のmicroRNA解析と診断・治療への応用

・**岩橋衆一**（徳島大学　消化器・移植外科）
肝星細胞による肝癌進展増強・薬剤耐性獲得の機序解明に関する研究
・**波多　豪**（大阪大学大学院医学系研究科外科学講座消化器外科学）
大腸癌発癌過程でのmicroRNAによるエピゲノム変化の解析
・**濱田隼一**（京都府立医科大学　消化器外科）
食道扁平上皮癌におけるRNA結合蛋白質TIA1の機能制御による抗腫瘍効果の検討

平成27年度

大原　毅賞受賞者

・**山本博幸**（聖マリアンナ医科大学　内科学）
消化器癌のゲノム研究から導き出した次世代の包括ゲノム解析法の開発と臨床応用

田原榮一賞受賞者

・**柴田龍弘**（東京大学　医科学研究所）
肝胆道系がんを対象としたがんゲノム解読とそれを起点としたトランスレーショナル研究

研究奨励賞受賞者

・**清水　大**（名古屋大学大学院　医学研究科　消化器外科学）
Transcriptome解析により胃癌肝転移関連遺伝子として検出したG protein-coupled receptor 155（GPR155）の発現及び機能解析
・**岩槻政晃**（熊本大学大学院　消化器外科学）
消化管間質腫瘍（gastrointestinal stromal tumor ; GIST）におけるイマチニブ耐性に関与するmicroRNA-gene pathwayの同定
・**三橋　慧**（札幌医科大学消化器・免疫・リウマチ内科学講座）
消化器発癌における常在微生物群ゲノムの重要性と分子異常・免疫応答との関連
・**向山　順子**（神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野）
がん幹細胞特異的マイクロRNAを標的とした大腸がん新規治療法の開発

平成26年度

大原　毅賞受賞者

・**三森功士**（九州大学病院別府病院　外科）
消化器癌におけるゲノム・エピゲノムレベルにおける進化の解明と難治性を生む多様性の克服

田原榮一賞受賞者

・**向所賢一**（滋賀医科大学　分子診断病理）
十二指腸液逆流に関連した上部消化管の発癌及び進展過程

研究奨励賞受賞者

・**五十嵐央祥**（札幌医科大学　消化器・免疫・リウマチ内科学講座）
大腸腫瘍の分子診断・個別化治療における新規バイオマーカー探索を目指したnon-coding RNAの網羅的解析
・**大原利章**（岡山大学大学院　医歯薬総合研究科　消化器外科）
固形癌に対する除鉄誘導療法の確立
・**神田光郎**（名古屋大学　消化器外科学）
早期診断への応用を目指した、膵癌前癌病変の癌化過程に関わる新規遺伝子変異の同定
・**財津瑛子**（九州大学大学院　消化器・総合外科）
胃癌におけるEncoding phosphate and tensin homolog（PTEN）の発現と予後及びHER2発現との関連に関する検討
・**澤山　浩**（熊本大学大学院　消化器外科学）
嫌気性代謝関連蛋白による抗癌剤耐性機序の解明と低分子化合物を用いた新規治療法の開発
・**田尻裕匡**（九州大学大学院　消化器・総合外科）
がん細胞の浸潤・転移におけるDOCK1の役割とその制御機構の解明
・**林　洋光**（熊本大学大学院　消化器外科学）
ヒト癌組織における腫瘍抑制シグナルHippo pathwayの破綻による癌幹細胞能獲得機構の解明と

臨床的特徴へのアプローチ
・**渡辺　亮**（群馬大学　病態総合外科学（第一外科））
IPMNにおいてSTMN1は増殖シグナルを活性化させ発癌に寄与する

平成25年度

大原　毅賞受賞者
・**野村幸世**（東京大学　消化管外科）
血清TFFを用いた胃癌スクリーニングの可能性の検討

田原榮一賞受賞者
・**塚本徹哉**（藤田保健衛生大学　病理診断科）
腸上皮化生と胃癌の発生進展機構の解明とその化学予防

研究奨励賞受賞者
・**田中　守**（名古屋市立大学　消化器・代謝内科）
新規光感受性物質である糖鎖連結クロリンによる光線力学的診断の開発
・**川俣　太**（北海道大学病院　消化器外科学分野I）
大腸癌浸潤・転移におけるchorionic gonadotropin-βの機能解析とその臨床応用
・**戸島剛男**（九州大学大学院　消化器・総合外科）
肝細胞がんにおけるオートファジーの生物学的意義について
・**宮林弘至**（東京大学　消化器内科）
膵発癌マウスモデルを用いた治療薬の効果・メカニズムの検討と新規治療標的分子の検討
・**及能大輔**（札幌医科大学　外科学第一講座）
ヒト正常水管上皮細胞及び膵癌細胞株を用いたPKCシグナル分子を標的とした膵癌分子標的治療の基礎的研究PKCα阻害作用とタイト結合発現調節機構
・**品川　慶**（広島大学病院　内視鏡診療科）
骨髄間葉系幹細胞の大腸癌増殖促進機構におけるメタロチオネインの重要性に関する研究
・**中島雄一郎**（広島赤十字・原爆病院　外科）
食道扁平上皮癌のcollective cell invasionにおけるpodoplanin発現の意義に関する研究

平成24年度

大原　毅賞受賞者
・**宇都宮　徹**（徳島大学　消化器・移植外科）
非癌部肝組織に着目した肝発癌分子機構の解明：DNA、miRNA、DNAmethylationマイクロアレイを用いた包括的解析

田原榮一賞受賞者
・**牛島俊和**（独立行政法人　国立がん研究センター研究所発がん研究部）
ピロリ菌感染によるエピジェネティック異常誘発の解明と発がんリスク診断への応用

研究奨励賞受賞者
・**大上直秀**（広島大学大学院医歯薬学総合研究科分子病理学）
胃癌細胞の非対称性分裂時における胃型・腸型形質発現の変化
・**島田　周**（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科分子腫瘍医学分野）
未分化型胃がんマウスモデルを利用した新規分子標的治療薬の開発
・**武谷憲二**（九州大学　消化器・総合外科）
大腸癌転移におけるWnt-β-カテニン経路でのATF3の新規バイオマーカーとしての意義の解明
・**馬場祥史**（熊本大学　医学部　消化器外科）
CGH microarrayを用いた食道癌LINE-1 hypomethylationの機能的メカニズム解析
・**坂部友彦**（鳥取大学大学院医学系研究科遺伝子医療学）
肝癌幹細胞における細胞内シグナルネットワーク解析

平成23年度

研究奨励賞受賞者

・**石本崇胤**（熊本大学　消化器外科）
　消化器癌細胞におけるCD44を介したROS制御機構の解明と治療への応用
・**北原秀治**（東京女子医科大学　医学部　解剖学・発生生物学講座）
　微小循環系の制御が腫瘍の悪性化抑制につながるか？
・**神藤　理**（医療法人寿楽会　大野記念病院　外科）
　胃癌の増殖進展におけるTGFβR/Smadシグナルの意義と分子標的治療の検討
・**仙谷和弘**（広島大学大学院医歯薬学総合研究科　分子病理）
　消化管癌転移巣の探索的オミックス解析による診断・治療マーカーの同定と癌幹細胞との関連
・**間野洋平**（九州大学大学院　形態・機能病理）
　肝細胞癌の増殖・進展におけるSTAT3シグナルの役割と腫瘍関連マクロファージによる
　STAT3活性化の解明に関する研究
・**安藤幸滋**（九州大学大学院　消化器・総合外科）
　胃癌におけるシャペロンタンパク質Mortalinによるp53抑制の分子機序解明
・**能正勝彦**（札幌医科大学　第1内科）
　消化器癌のグローバルDNAメチル化、microRNAの異常発現の解析とそれらを標的とした予後予測、
　個別化治療の可能性

平成29年度研究奨励賞授賞式

平成29年度研究奨励賞受賞者

歴代理事長一覧

・初　代（1998 ～ 2001）　大原　毅
・第2代（2002 ～ 2003）　杉町圭蔵
・第3代（2004 ～ 2008）　上西紀夫
・第4代（2009 ～ 2017）　前原喜彦
・第5代（2018 ～）　島田光生

委員会名・委員名一覧

財務委員会

委員長：掛地吉弘

委　員：居村　暁、高森啓史、調　憲、塚本徹哉、川中博文、伊藤心二、宮下知治、大賀丈史

国際委員会

委員長：安井　弥

委　員：瀬戸泰之、松原久裕、神山俊哉、愛甲　丞、掛地吉弘、池上　徹、江頭明典、横堀武彦

役員選考委員会

委員長：馬場秀夫

委　員：辻谷俊一、楠本哲也、藤也寸志、浅尾高行、宮崎達也、宇都宮　徹、山下洋市、向所賢一

会則委員会

委員長：汐田剛史

委　員：藤村　隆、池田哲夫、愛甲　丞、吉住朋晴、佐伯浩司、杉町圭史、吉永敬士

在り方委員会

委員長：夏越祥次

委　員：加藤広行、上野真一、掛地吉弘、浅尾高行、伏田幸夫、清水伸幸、相島慎一、高橋孝夫、渡邊雅之、能正勝彦

倫理委員会

委員長：吉田和弘

委　員：鴻江俊治、別府　透、中島秀彰、森田　勝、森根裕二、野村幸世、松本伸行、馬場祥史

研究推進委員会

委員長：三森功士

委　員：藤原俊義、武冨紹信、藤村　隆、調　憲、米満吉和、八代正和、大上直秀、谷内田真一、吉田　優

学会賞選考委員会

委員長：桑野博行

委　員：安井　弥、小寺泰弘、吉田和弘、北川雄光、大辻英吾、三森功士、掛地吉弘、調　憲、宇都宮　徹、沖　英次、汐田剛史

大会長・開催地一覧

回	会期	会場	会長（所属）[敬称略]
第1回	1989年9月2日	東京プリンスホテル（東京）	大原　毅 （東京大学第3外科）
第2回	1990年9月1日	西鉄グランドホテル（福岡市）	杉町　圭蔵 （九州大学第2外科）
第3回	1991年9月7日	マーキュリーホール（前橋市）	長町　幸雄 （群馬大学第1外科）
第4回	1992年9月4～5日	金沢市文化ホール（金沢市）	磨伊　正義 （金沢大学がん研究所外科）
第5回	1993年9月10～11日	全共連ビル（東京）	恩田　昌彦 （日本医科大学第1外科）
第6回	1994年9月2～3日	神戸国際会議場（神戸市）	下山　孝 （兵庫医科大学第4内科）
第7回	1995年9月8～9日	大分コンパルホール（大分市）	内田　雄三 （大分医科大学第2外科）
第8回	1997年9月4～5日	南海サウスタワーホテル （大坂市）	曽和　融生 （大坂市立大学第一外科）
第9回	1998年9月10～11日	宇都宮東武ホテルグランデ （宇都宮市）	金澤　暁太郎 （自治医科大学消化器外科）
第10回	1999年9月2～3日	熊本ホテルキャッスル（熊本市）	小川　道雄 （熊本大学第2外科）
第11回	2000年9月7～8日	米子コンベンションセンター （米子市）	井藤　久雄 （鳥取大学第1病理）
第12回	2001年9月6～7日	シェーンバッハ砂防（東京）	小俣　政男 （東京大学消化器内科）

第13回	2002年9月5～6日	千里ライフサイエンスセンター (豊中市)	門田　守人 (大阪大学外科)
第14回	2003年9月11～12日	ホテル日航金沢(金沢市)	三輪　晃一 (金沢大学がん局所制御学)
第15回	2004年8月19～20日	ロイトン札幌(札幌市)	今井　浩三 (札幌医科大学第1内科)
第16回	2005年10月13～14日	鹿児島県民交流センター (鹿児島市)	愛甲　孝 (鹿児島大学第1外科)
第17回	2006年9月14～15日	愛知県がんセンター 国際医学交流センター(名古屋市)	立松　正衞 (愛知県がんセンター腫瘍病理)
第18回	2007年11月8～9日	ウェルシティ札幌厚生年金会館 (札幌市)	平田　公一 (札幌医科大学第1外科)
第19回	2008年8月28～29日	別府　亀の井ホテル(別府市)	森　正樹 (九州大学分子腫瘍学分野・外科)
第20回	2009年11月26～27日	オリエンタルホテル広島(広島市)	安井　弥 (広島大学医歯薬学総合研究科)
第21回	2010年11月18～19日	軽井沢プリンスホテル(軽井沢町)	桑野　博行 (群馬大学大学院病態総合外科学)
第22回	2011年11月25～26日	ホテルニューオータニ佐賀 (佐賀市)	宮崎　耕治 (佐賀大学医学部附属病院
第23回	2012年11月14～16日	ルネッサンスリゾートナルト (鳴門市)	島田　光生 (徳島大学　消化器・移植外科学)
第24回	2013年9月5～6日	石川県立音楽堂(金沢市)	源　利成 (金沢大学　がん進展制御研究所)
第25回	2014年11月13～14日	ホテル日航福岡 (8th ISGCと併催)	前原　喜彦 (九州大学大学院　消化器・総合外科)
第26回	2015年11月19～20日	米子全日空ホテル(米子市)	汐田　剛史 (鳥取大学大学院　遺伝子医療学)
第27回	2016年9月15～16日	城山観光ホテル(鹿児島市)	夏越　祥次 (鹿児島大学 消化器・乳腺甲状腺外科学)
第28回	2017年11月17～18日	メルパルク熊本 (9th ISGCと併催)	馬場　秀夫 (熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科学)
第29回	2018年11月16～17日	都市センターホテル	落合　淳志 (国立がん研究センター研究所　副所長)

研究推進委員会からのお知らせ

日本消化器癌発生学会 研究推進委員会 委員長　**三森 功士**

先日の総会でご案内いたしましたが、本学会の会員間で「動物モデルを所有する先生方」と、「動物モデルを必要とする先生方」との間でマッチングを行い何組かの共同研究の枠組みを創出したいと考えています。

会員施設から募集を行ったところ、以下のような回答がございました。

動物モデル探索中

#	癌腫	動物腫	モデル名	内容	主な用途
1	不問	不問	自然発がんモデル		がんの匂い物質の特定
2	胃がん	マウス	腹膜播種モデル	・肉眼的播種結節モデル ・腹腔洗浄細胞診陽性モデル	
3	a) 胆管乳頭状腫瘍 b) 舌・食道がん		a) Fgfr2 flax, など b) CK17-Cre ER など	a) 胆管乳頭状腫瘍発生と由来の解析	

動物モデル提供可能

1	大腸がん	マウス	マウス大腸がん腹膜播種モデル	・ルシフェラーゼ発現大腸がん株化細胞細胞 ・播種巣数を犠牲死なく定量	・in vivo 正確な薬効評価 ・腹膜播種に対する iv と ip どちらのルートが適切か判定可能。
2	大腸がん		外科切除症例からのオルガノイド	・大腸がん症例の非腫瘍部粘膜 ・腫瘍部からのオルガノイド樹立（12例成功）	化学療法感受性抵抗性を検討し、特定の遺伝子異常との相関検討
3	大腸がん	マウス（BALB/c ヌード）	領域リンパ節転移を有する粘膜下層浸潤直腸がんモデル	・マウス直腸に GFP 導入大腸がん細胞株を局注移植した同所性直腸がんモデル。 ・移植後1週間、約80%の確率で領域リンパ節転移	・大腸がんリンパ節転移治療実験 ・早期大腸がん治療モデル。 ・顕微鏡下でライブイメージングやリアルタイム治療効果
4	食道胃接合部がん	マウス（BALB/c ヌード）	道胃接合部がんの同所性マウスモデル	・マウス食道癌または食道胃接合部がんの同所性マウスモデル ・粘膜下から筋層、漿膜下に腫瘍が形成され胃小彎リンパ節転移 ・IVIS を用いた in vivo イメージも	・食道癌あるいは食道胃接合部がんに対する治療実験
5	胃がん	C57BL6 マウス	C57BL/6 マウスへの肺転移、リンパ節転移、不腔内転移モデル	p53KO マウスに MNU を投与して作製した胃がんから樹立した株化細胞 ・C57BL/6 マウスに皮下移植可能。肺転移、リンパ節転移。 ・C57BL/6 マウス腹腔内投与にて腹膜播種形成	・播種、転移形成の抑制薬の検討の実験 ・担癌状態の全身的免疫能などの検索も可能

動物モデルの利用を希望する場合、また、動物モデルをご提供いただける場合には、事務局までご連絡ください。

何卒よろしくお願い申し上げます。

〒102-0072　東京都千代田区飯田橋 3-11-15UEDA ビル 6 階
日本消化器癌発生学会事務局
TEL：03-3238-1689　FAX：03-3238-1837
E-mail：info@j-sgc.org

日本消化器癌発生学会特別研究推進 理事長直轄プロジェクト「癌代謝からみた発癌・進展メカニズム解明の新展開」のご報告

平成 30 年 2 月 2 日（金）に徳島大学病院・日亜ホールブルー（5F）にて一般社団法人日本消化器癌発生学会理事長直轄プロジェクト特別推進研究「癌代謝からみた発癌・進展メカニズム解明の新展開」の研究発表会が行われました。

島田光生新理事長ご臨席の中、東北大学加齢医学研究所遺伝子発現制御分野・教授・本橋ほずみ先生をお招きして基調講演を賜るとともに、5 名の委員からは「癌代謝からみた発癌・進展メカニズム」に関する最新のご発表をいただき、活発なディスカッションが行われました。発表の後、理事長直轄プロジェクト委員への委嘱状の授与が行われました。

日本消化器癌発生学会特別研究推進 理事長直轄プロジェクト
「癌代謝からみた発癌・進展メカニズム解明の新展開」
日時：2018 年 2 月 2 日（金）16:00 ～ 18:00
場所：徳島大学病院　日亜ホールブルー（5F）

＜開会の辞＞ 16:00 ～ 16:05
日本消化器癌発生学会理事長（徳島大学消化器・移植外科学教授）
島田光生

＜基調講演＞16:05 ～ 16:45
演者：東北大学加齢医学研究所遺伝子発現制御分野教授　本橋ほずみ先生
「NRF2 依存性がんの成立と悪性化機構」
司会：徳島大学地域外科診療部特任教授　居村　暁

＜理事長直轄プロジェクト発表＞16:50 ～ 17:55（各発表 8 分・質疑応答 4 分）
司会：徳島大学消化器・移植外科学准教授　森根裕二
1. 演者：九州大学大学院消化器・総合外科学助教　戸島剛男先生
「肝癌増殖におけるオートファジーの活性化によるエネルギー再構築の重要性」
2. 演者：岐阜大学大学院医学系研究科腫瘍外科学　杉山太郎先生
「microRNA による Warburg 効果の調節」
3. 演者：慶應義塾大学医学部外科助教　岡林剛史先生
「メトフォルミンの大腸癌肝転移抑制効果について」
4. 演者：熊本大学大学院生命化学研究部消化器外科学医員　有馬浩太先生
「慢性炎症における膵癌進展メカニズムの解明」
5. 演者：金沢大学がん進展制御研究所腫瘍制御研究分野助教　堂本貴寛先生
「大腸がんの腫瘍促進的エネルギー代謝における GSK3β の病理作用」

＜閉会の辞＞17:55 ～ 18:00
日本消化器癌発生学会理事長（徳島大学消化器・移植外科学教授）
島田光生

第 29 回　日本消化器癌発生学会総会

会　期：2018 年 11 月 16 日（金）～ 17 日（土）
会　場：都市センターホテル　（東京都千代田区平河町 2-4-1）
会　長：落合　淳志　（国立がん研究センター　先端医療開発センター　センター長）
演題募集期間：2018 年 4 月 20 日（金）～ 7 月 6 日（金）
事務局：〒 102-0072　東京都千代田区飯田橋 3-11-15 UEDA ビル 6F
株式会社クバプロ内
TEL：03-3238-1689
FAX：03-3238-1837
E-mail：soukai29@j-sgc.org
URL：http://www.j-sgc.org/jsgc2018/

編集後記

徳島大学　消化器・移植外科学　**居村　暁**

昨年11月、熊本で開催された本学会第28回総会での理事会にて新理事長に島田光生先生が選出されたことを受け、徳島大学が事務局幹事を担当させていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。前理事長の前原喜彦先生におかれましては平成21年から8年もの長きにわたり、本学会の発展にご尽力いただき、心より感謝申し上げます。ほんとうにお疲れさまでした。

第28回総会の代議員会でも報告されましたが、2017年10月時点での本学会の会員数は968人となっており、最も少なかった2010年の790人から徐々にですが増加しています。しかし、会費未納者が多いことが問題となっております。2017年のデータを見ると評議員で84.5％、評議員以外では37.8％という納入状況でした。会員の皆さまからの年会費は本学会を運営していく上で重要な収入源であります。会員の皆さま、何卒ご協力の程、よろしくお願いいたします。

さて、今回のNews Letterでも特集として平成29年度の大原賞、田原賞、研究奨励賞について受賞内容を掲載しました。今年度受賞された先生方の研究内容、また過去に受賞された研究課題をあらためて見てみると、外科、内科、基礎系それぞれの分野において素晴らしい研究が行われてきたことがわかります。

今後も外科、内科、基礎系の各分野から消化器癌の発生・進展とその制御に関する研究結果を発表し、ベテランだけでなく若手研究者も積極的に議論に参加できる有意義な学術集会が継続していくことを願うとともに、事務局として本学会運営に少しでも寄与できるよう努めてまいります。

発行　一般社団法人日本消化器癌発生学会事務局
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F
株式会社クバプロ内
TEL：03-3238-1689　　FAX：03-3238-1837

発行日　2018年2月16日
発行者　一般社団法人日本消化器癌発生学会
編　集　総務委員会